

Title	稲荷社祀官大西親盛の和歌 続：京都学・歴彩館蔵『〔歌日記〕』翻印と解題(一)
Sub Title	A sequel study on waka poetry of Onishi Chikamori, a shinto priest of Fushimi Inari Shrine in the middle Edo period : research and reprint of "utanikki" owned by the Kyoto Institute, Library and Archives
Author	一戸, 渉(Ichinohe, Wataru)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2019
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.54 (2019.) ,p.19- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生前文庫長退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20190000-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稲荷社祀官大西親盛の和歌続

— 京都市学・歴史館蔵『歌日記』翻印と解題（一） —

一戸 涉

はじめに

本稿は『斯道文庫論集』第五十三輯に掲載した拙稿「稲荷社祀官大西親盛の和歌―東丸神社蔵『松葉集』解題と翻印―」（以下、前稿）の続編として、京都市学・歴史館の所蔵する大西家文書乙に含まれる大西親盛（ちかもり一七〇三―一七七八）の歌稿を翻印し、解題を付すものである。該書は書名が付されておらず、所蔵機関において「歌日記」という書名で整理されている。内容は日記というより年ごとの詠歌を書き留めた歌稿というべきものであるが、本稿では所蔵機関の整理書名に従うことにする。

前稿でも述べた通り、親盛は稲荷社祀官にして非蔵人を兼ね、また荷田春満及び冷泉為久・為村・為泰の指導のもとで和歌の修練を積んでいた。前稿で紹介した『松葉集』は元文三年（一七三八）から明和二年（一七六五）にかけての詠歌を収録するが、本稿で取り上げる『歌日記』は、明和四年（一七六七）九月から安永七年（一七七八）六月にかけての詠歌を収録しており、約二年間の空白を挟むものの、これら二書によって、冷泉家入門後の親盛の詠歌活動のほぼ全貌を把握することが可能となる。

分量の関係上、本輯には前半部分（巻頭から安永二年まで）の翻印を掲載し、次輯に後半部分（安永三年から安永七年まで）

の翻印と解題を掲載することにする。なお、『歌日記』の書

誌を略記しておけば以下の通りとなる。長帳綴。一冊。無表紙。

一四・三×三九・六種。〔大西親盛〕〔明和四〕〔安永七年〕写。

整理番号大西家資料乙五二八。

『歌日記』翻印

〔凡例〕翻印にあたっては、以下のように処理を加えた。

- 1、漢字は原則として通行の字体に改めた。
- 2、変体仮名は現行の仮名に改めた。
- 3、明らかな誤字、脱字や衍字等は、適宜、右傍に（ママ）などと注記した。
- 4、通読の便宜を考慮し、和歌を除いて読点を付した。
- 5、虫損・破損等で判読の困難な箇所はその文字数分の□で示した。
- 6、和歌や文章の添削は該当字句の左傍に抹消符として「~~ニ~~」を用い、訂正字句のある場合は該当字句の右傍に記した。
- 7、度数にわたり訂正が加えられるなど、通常の翻字のみでは原本の状態について表現が困難な場合、後注にて現状を説明した。
- 8、和歌の詞書や歌題、肩付や左注の類は原則として二字下げとした。
- 9、和歌は原本では二行に分ち書きされているが、字配は無視した。

10、細字注記など原本の表記をなるべく尊重したが、読みやすさを考慮して適宜修正を加えた。

11、各年の冒頭に記される年号についてはその前に空行を入れ、読みやすさを考慮して字下げなしで記した。

12、添削以外の単なる誤字の訂正については訂正後の形で翻字した。

13、符号などを用いて排列移動の指示が付されている和歌については、その指示に従って排列を改めた形で翻字した。ただし移動位置が不明瞭なものについては原本のままとした。

14、その他、校注者による注記は（ ）内に記した。

(前欠カ)

九月十三日竈家信名宿祿後室弁号真寿院三回忌信郷追慕勸進

十三夜月 組歌十一首巻頭

長月やみとせの秋のおもかけをこよひ名高き空にしのはん

九月十日於毛利豊後守亭

稽古会応乞当座

花埋苔

雪とのみふり敷はなに埋れてこけのほそ道わけそまとへる

九月十三夜於月前詠十三夜月十三首

稲荷山秋の最中も松葉のこすゑを照す長月の影

長月の兼てまたれしかひ有てこよひ名たかく照す山端

珍しなたくひ最中の秋もあれとみちさる月の照まさる夜は

日につける光りやこよひ長月の空に神代の秋をしそ思ふ

いはまくもかしこけれとも日にならふ光りや今宵月読神

めてそめし御世の光りを長月の今宵照そふそらにあふかん

くらへ見ん光そこよひ玉くしけふた、ひ月の名にしおふ空

唐人はしらしな今宵日本の光名たゝる長月の空

唐国はしらすねなまし照増る此秋つすの月の今夜を

とよあかりみよの光もいちしるくくまなき月の空にあふかん

秋ふかく月のかつらや染ぬらんわきて照そふのちの光は

最中でふ秋に光はおとらしと猶なか月の空を照そふ

千世かけて秋や幾秋めてな、んまささのかつら長月の影

九月十三日及深更従信郷之許題三首到来応請詠之

十三夜月

今宵尚やまと嶋根の名も高くそらに照そふ長月のかげ

池月

秋風に雲霧はれて池水もちりなく見えて澄る月影

寄月忍恋

うしや世に忍ふ涙もやとりこし袖の月にはえ社つゝまね

九月廿七日家母十三回追悼組題七首之内詠三首残四首親臣

親業詠之

稲荷社奉納

水初結

此朝け河風さえて行水のよとむ岩間や氷そめけん

十月十日龜家
社友稽古月次

江寒蘆

浦風に入江さやきて霜枯の蘆間とほらぬ浪も寒けし

三嶋江やほの見し秋の面影もなみ間寒けき霜の枯蘆

同当座応求 水辺螢

かけうつす蘆の下水葉かくれに見えみ見えずみ螢飛かふ

暮秋残菊 信郷応求

暮そ行秋はまかきのよそなれや尚咲のこるしら菊の花

閏九月尽 同上

長月をかさねなれしもあたたなれや残る一夜の秋のわかれも

十二月分
稲荷社月次奉納

社頭雪

稲荷やまとしある御代のしるしとてこたかくふれる杖のしら雪

月次稽古会
十一月分

遠山雪

雪はれてむかふこしちにふり積るゆきをみやこの遠の山端

今年十二月
松本家為紀百五十回為勝勸進

冬懐旧

思ひ出で松も昔をしのふらん世々ふりにける雪の軒端に

来年子二月十四日冷泉家為満卿百五十回追慕為村卿出題勸進

春懐旧

年ごとに咲そふ花の梅か香に植しその世のはるやしのはん

来子年十一月より二月取越毛利家公慶宿禰百回公林宿禰追

慕勸進百首組題之内得五首

立春

荒玉の年のをたまきくりかへししたふその世の春やきぬらん

山葵

跡をとふ山路の葵とりそへてこれも手向けん露の言の葉

暁菰

小夜ふかく萩吹風に夢たへて見ぬ世をしのふ暁の空

千鳥

よせかへる浪のうきねの小夜枕哀をそへて千鳥なくなり
待恋

かり枕たのめしよひの更るをもおもひかへして尚や待見ん

已上五首

十月十九日
松本和泉守亭月次稽古会応求当座

羈旅

ふる里の夢路もたえて小夜深旅ねの床に積るしら雪

稲荷社月次奉納

十一月分
早梅句

神垣に春の立枝の色見えてとしをへたてす匂ふ梅か香

於松本讃岐守亭月次稽古会

十一月分
網代

哀世をわたるわさとして網代もるそて寒からし宇治の川かせ

当座
祝言

幾千年尚もさかえん家の名の松にそ契る言の葉の道

正月十七日
年内立春

今朝の先春きにけりと尚残るふゆの日かけも更に長閑けし

右為村卿より結句殊外宜之由預御賞美之御加筆

いとはやも年のこなたに立□□□□霞の衣はるは来にけり

亥歳暮 予六十五歳

御点雪とのみ身はいたつらに六十あまりいつしか年のふり積り行

梓弓春をいそきし身は老て今年は暮のはやさこそ思ふ

子歳旦

御点此朝け霞もともに立そむるはるの光や四方にみつらん

アカクラ溟滓に霞て春の立かへる空や神代のためしならまし

明和五年正月

稲荷社月次法楽 冷泉家出題

正月分
峯松年久

稲荷やまいやとし高く春にそふみとりをみつの峯の松原

二月一日冷泉家

稽古始
柳弁春

時そとや宿の砌に青柳のなひく姿は千世の春風

二月廿二日松本讃岐守方へ被招詠哥

讃岐守の許に花見にまかりて

浅からぬ人の恵みの色そへておいか心も花にわすれぬ

稲荷社奉納

二月分
春草漸青

また浅き春のなかも深草の野はいつしかにみとりをそゝふ

同四分法家
瀧辺花

散ぬ間の浪も桜に埋れてはなより落る瀧のしら糸

三月十六日
於東家中稽古会始

月次二月分 得兼題三首

庭梅

年ごとに咲そふ庭の梅かへは千世の春しる花と社しれ

同
柳風

花にいとふ心も更に忘られてやなきにあかぬ庭の春風

同
待恋

ふけぬとて猶も待みんこぬ夜とてあけぬ限りは打もねられし

同十六日当座得探題

籬菊

秋幾世菊は色にほふらん老せぬ花の色をかさねて

社友月次稽古会三月分

四月十九日於羽倉上総介亭会補

花

春ごとに花こそしらめあこかれて色香にそむる老の心も

同日当座探題之内到来応求

野若菜

小松はら子日せし野にけふは又ちとせをしめて若菜つまゝし

当社法楽月次

四月分
山早夏

立残る霞も今朝はなつころもみとりを山の色にかさねて

社友稽古月次四月分二首

於毛利豊後守亭会 探題 五月十一日

卯花

夕やみの空にしられぬ月雪の光を見せて咲るうの花

窓竹 同断

昔誰めてはしめけん呉竹の直を友と窓にうつして

詠牡丹花

植残すめくみの露も深み草花にむかしの春やしのはん

右三月廿七日捧灵壇於牡丹花時着花供進哥

同詠牡丹

浅ちふの宿も色香のふかみ草またたくひなき花と見るまで

右者四月朔日詠之

四月八日初聞子規作哥

山近くすすは聞かしほとゝきすまた世にしらぬ今の初音も

当社奉納

五月分
五月雨

五月雨に猶音高いなり山みかささりて落る瀧波

五月十九日於松本信濃守亭月次会

橘 当座暁夏

見し梅の春も昔としのはれて猶も軒端に匂ふ立花

雪中鶯
同当座四月分

咲梅の花はそれともしら雪の梢に、ほふ鶯の声

水鶏
同

心なくかとさせりとや叩らん月にくひなの我をいさめて

照射
同

音にたてぬ鹿のおもひの落ならん峯にもをにもともしするよは

当社奉納

六月分
夕立雲

雲はやみふると見しまにいなり山よそにすき行夕立の空

相模会当六月分稽古会二首

籬瞿麦

結び置笹の露をたてぬきにしき織なすやまと撫子

同断
名所松

墨の江の松にそおもふ老の波かけてかひある言のはもかな

同当座
松藤

春ふかきみとりも花に埋れてかせも音なき松の藤波

五月十九日於松本信濃守亭会

暁夢 得題当座

覚て今あかつき深くしたはる、哀むかしの夢の行衛を

六月
童蒙稽古会

夏月涼

夕暮はたへかたかりし暑をも月にわたる、袖の涼しさ

大西東家親方宿禰十三回忌追慕親業勸進組題之内

早春鶯

めぐりこし春の昔をなれもけふおもひ出てやうくひすの鳴

当社奉納七月分

野径萩

わけ行は露も乱れん真萩原花咲うつむ野辺のほそ道

月次稽古会七月分 祓川常陸介催

萩

今しはし露なから見む真萩原ふきなみたしそ花の夕風

同上
薄

すみれ草摘し野もせの花す、き招くを春のゆかりとやみん

同上
祈恋

祈るてふしるしもあれな貴布祢川うきとし波を袖にかけきて

子等稽古会

七夕

雲霧もたちなへたてそ此ゆふへまれにあひあふ星の中空

当社法楽月次

八月分
霧中馬

立こめし霧の幾重もひまあれや見えみ見えすみわたる雁かね

社中月次稽古会

八月分
權 羽倉撰津守催

植てみるこ、ろの色も秋露ふかく露秋にか、れる朝かほの花

鶴 同断

夕なみのそれからぬかしらつるのあしへほのかに立るをそ見る

八月廿七日於祓川家会探題到来

当社
社頭神

かけ高く霜をかさねて神垣に幾世かふりし森の神は

於竈家会探題到来

九月十日当座
閏九月尽

いつはあれと尚社惜め長月をかさねてなれし秋の別を

当社法楽月次

九月分
菊帯露

御点
いと、尚花の光もをそへて秋ふかく置しそふ露しに匂ふしらきく

無点
神垣にさ、くるみかの菊の露つかふる袖もぬれてかほれる

稽古会 松本讃岐守催

九月分
月前菊

霜のちうつろふとしも見えぬまで月に色そふ秋のしらきく

新樹風

吹みたす露も涼しき若緑花にいとひし庭の朝風

当社月次法楽

十月分
朝時雨

稲荷やま今朝は冬立しるしとやすき間くもりて先しくるらん

社中稽古会月次 大西下野守催

十月分
千鳥

浦風のはけしきま、に小夜千鳥なみの立るのこゑそひまなき

羽倉上総介信賢勸進外祖父一周忌霜月上旬追善

寄夢懷旧

寄夢懷旧

さらたに昔をこふる老の身の夢の枕にしたふおもかけ

稲荷社法楽

十二月分
水鳥多

さ、浪やにほてる月に影そひてかすく見ゆる浦の水鳥

社友稽古会 十一月分 権目代信賢催

水鳥

池水のをしの毛衣小夜ふかくしもをかさねて音をや鳴らん

稲荷社法楽

十二月分
竹雪深

音たかくつもるもしるし深草やたけの葉山の雪の下折

稽古会十二月分
蔵川常陸介催

鷹狩

野を遠みかへるさいそく狩人もとたちに又そ心ひかる、

眺望

墨江や遠きなかも此朝け雪に間ちかく向ふ嶋山

明和六年

稲荷社法楽始

鶯知万春

いなり山八百万代の春しめて杉間に来居る鶯の声

冷泉家会始

子日祝

庶人もよはひを野への小松原ひきつれいはふ宿の初子に

当社月次法楽

二月分
柳先花緑

浅みとり春の柳のいとはやも花にさきたつ色をこそ見れ

当社月次法楽

三月分
落花如雪

木かけのみふり社まかへ山桜風のさそはぬ花のしら雪

社中月次稽古会

二月分於竈家会始

春嶺杉

いなり山春のしるしと峯高くみとりをそへてかすむ杉村

同当座
葦間鶴

難波かたつのくむあしのめも春にあそふ友つる長閑かるらし

於東家下総守亭十月分会

補当座
浦初秋

秋きぬと色は見えねと松にふく音にそしるき志賀の浦風

社中月次稽古会三月分

於当家親臣之会当二月分補兼題

花留客

けふこゝに花をとひ来てをのゝえの朽しためしも色香にそおもふ

当社法楽四月分

雨中新樹

しけれ尚かけそふ露の玉かしは若葉うるほふ雨のめくみに

肥後国祇園社神職行藤志摩守北野社へ奉納之由勸進祇園社

僧新坊ヨリ頼来

花鏡

くもらしなあけの神垣かけみえて照そふ水の花のかゝみも

社中稽古会四月分於毛利豊後守亭被催但去月補会也

首夏藤

見し春の色のゆかりと立よれば若葉しけりてかゝる藤波

当社法楽五月分

五月郭公

時鳥いなりの山のすきかてにをのかさつきの声そ木高き

社中稽古月次五月分

野郭公

時鳥つまやこふらん野をしめてさつきもわかぬしのひ音の声

当社法楽

名所鶴川

鶴ふねさす篝や幾瀬大ぬ川あらしの山も照すはかりに

社中稽古会

松下泉

涼しさはむすはぬ袖もかけふかく松の下行庭の真清水

四月於毛利豊後守亭稽古会得探題

郭公何方

夕間暮おほつかなしや時鳥行方わかぬ今の一声

去年十月分補稽古会於大西下総守亭被催探題到来

契経年恋

瀬にかはる習そつらき飛鳥川幾とし波をかけし契りも

去年十一月分補稽古会於羽倉上総介亭催探題

花慰老

春ことにふりせぬ花の色香にそこゝろをそめて老もわするゝ

東丸先生今年明和六年七月二日三十三年にめぐりければ老

翁の御霊に詠て奉る哥といふ十五字を冠に置て秋哥にふる

きを思ふ心をよせて供ふ哥十五首

思おもひ出でて昔むかしをしたふ袖そでにけさつゆ置おそへて秋あきは来きにけり
散ちそむるもろき一ひと葉はの秋風あきかぜに哀あはむかしのなけきをそおもふ
軒の近くしのふ昔むかしのあき風かぜやをき吹ふみたす音ねそかなしき
見みし人のなき跡あととへはあれはて、尚なほふり残のこる露つゆの秋萩あきあき
たかために昔むかしこふるや女郎にみだれ花身はなみはあたし野のの露つゆとけぬへく
招まかねと跡あととふ野辺のの花はなす、きつゆも深草ふかぐさそてそしほる、
匂におふその野のとなる庭にわの蘭香らんかうをなつかしみ我われはとひきつ
蓬生よもぎに庭にわの訓のりの跡あとふりしあきをとひきて鈴虫すずむしの鳴なめ
都みやこ辺へにむかしの秋あきをしのひ鳴雁なみかりのなみたや袖そでにしくる、
照てそふる月つきや昔むかしの面おもてかけに妻つまこひすらんなら鹿かの声こゑ
待まちむかふその山端やまはたにおもひ出でるつきの昔むかしの秋あきのあはれを
積つりこし秋あきをかさねて衣打えうちあはれ夜よさむはむかしかはらて
類るいもなき色香いろかぐに人ひとをしのへとて秋あき幾いくめぐり咲さむしららく
薄うもみちぬしなき跡あとに年としふりて秋あきやなききの色いろに露つゆけき
手た向むかしぬ秋あきの言ことの葉露はなつゆなからみそとせあまりみとせふりきて

以上十五首

冷泉家為益卿八月廿三日二百回忌供進之旨民部卿為村卿勸進

秋懷旧

あふけ猶遠なほとほきむかしのめくり来て月にその世よの秋あきの光ひかりを
於お毛利家もうりけ会得題当座

寢覚月

みし夢ゆめの思おもひも月に忘わすられてねさめにむかふ影かげそたのしき

於お松本信濃守亭会得題当座

冬月

天川空あまがわやこほりてすみわたるかけも寒ふけき冬の夜よの月つき

当社法楽

新秋夕露
七月分

秋あきさぬといなりの山田打やまだそよくかせも涼すずしく結むすふ夕露ゆふつゆ

荷田信郷にわたのしんきやう稲荷山いなぎやまの十二景じふにけいをえらみ作つくれり。嶋田内近助しまだのちかすけ、紀

元直もとただに其景そのけいを画えしめ東涯とうが子こか孫伊藤忠蔵そんいとうのちゆうざう善韶ぜんじやうに詩うたを作つくらし

めて既に壹卷いちまきとし、信郷しんきやう是こゝを提ひ来きて愚詠ぐゑいをこふ。予よ二たひ

三たひいなみ侍さむらいれと又またかたくいなむも心こゝろさしをへたつるさ

まに似たれは、もたしかたく読よ侍さむらいる哥うた十二首

三峯翠黛

麓ふもとより春はるは一入山いっしやんまゆのみとりをみつの峯たかねのこたかさ

被川桜花

みそき川がわかけをうつして山桜やまざくら色香いろかぐたへなる花はなのしらゆふ

不洩流泉

尽せしな幾世を杉の春ふかくみとりをうつす山のいつみは

平原矮松

花なれや小松か原に詠めやる遠のたかねにかゝるしら雲

孤巒返景

暑き日もいとほぬわさに暮ちかく真柴とりく帰るやま

阪道驟雨

時の間に坂道つらく雲とちてあらしにきほふ雨の足とき

劍巖蒼苔

山かけのみとりも深く動なきいはほも苔の色に涼しき

杉間青楓

涼しさはなつもよそなる谷陰にすぎもかへても若葉しけりて

栗谷急湍

谷ひく瀧のなかれも秋ふかくうつすもみちの色にかはり行

三角明月

照まさるいつくはあれと此山のみねより峯にむかふ月かけ

新池水禽

池水にさそふ嵐の木葉かといろく見えてうかふ鴛鴨

童山白雪

此朝けこゝにわけきて見わたせはよにめつらしき雪の山く

已上十二首

非蔵人橋本越後橋堯常之七十賀橋本下野堯直勸進

寄鶴祝

此宿に千世をかさねて契れ猶松にきなる、鶴の毛衣

花色

なへて世にあかぬは花の色ならん心をそめぬ人しなれば

月次稽古会於松本讀岐守亭被行之七月分

草花露

朝日さす草の笹に咲花のいろをかさねて置るしら露

探題当座七月廿六日松本讀岐守亭会

湖水

吹おろすひらの山かせさえくしてよするもこほる志賀の浦波

当社法楽

山月初昇

澄のほる月はいなりの山高く光をみつる峯に照そふ

稽古会八月分八月十日於下総守亭

湖上月

兼題

浦かせに雲霧晴て月こよひ光みちぬるしかのうな原

名所里 当座

とはてしも伏見てふ名は家くの軒端にしるき里の呉竹

当社法楽

九月分

山家秋深

此ころは鹿の鳴音も身にしみてあきのふけ行山陰の里

稽古会九月一日相模守会当兼題

暮秋虫

くれて行秋のわかれを恨みてや哀よふかく虫の鳴らん

同当座探題

橋霞

行かたも見えずかすみて旅人のわたるも遠きせたの長橋

九月十三夜月

未遠く秋を契りて老も見ん世をなか月の名にしおふ影

北山詩仙堂毘丘尼勸進

隠士石川丈三(マ)百回忌為追善千人千首組題勸進

閑居月

秋のこよひ月には尚もしたふらんちりなく住し人のむかしを

古上北面羽倉縫殿頭入道延純五拾四忌追慕羽倉紀伊守荷田

信里勸進見別家氏人也

若菜

めぐりこし昔の春を思ひ出てわすれかたみに若菜をそ摘

愛菊友伏見奉行組与力津田為右衛門為追善於伏見本教寺菊

花供進会着菊花哥

契り置千世もまことに露の間とまかきの菊にしたふおもかけ

稻荷社法楽

十月分

枯野朝風

見し秋の色としもなく霜枯て尚置そふる野辺の朝風

於信邦亭稽古会兼題

十月分

瀧落葉

風さそふ音羽の山は紅葉、のくれなるふかく落る瀧つ瀬

同日探題並座
擣衣近

宿ちかく聞に哀は深草のつゆもひまなく衣打こゑ

稻荷社法楽

十一月分

雪中殘鷹

秋にをそれ
をくれきて雪のふ、きや扨侘つはさを寒みわたる雁か音

稽古会月次

十一月分

雪未深

けふはまた問はや雪の浅茅原あすもふりなは道やたえなん

下鴨社禰宜馬糞九百五拾年遠祭泉亭 勸進

飛鳥井家御出題
寄竹述懐

移し植しその世はしらしら雪のふりきてしのふ軒の呉竹

稲荷社月次法楽

十二月分
家々歳暮

かはらしな宮もわら屋もへたてなく暮行としをしたふならひは

於目代稽古会信賢催

十二月分
年内梅

いとはやも梢も春の色見えて年のこなたに匂ふ梅か、

十一月稽古会得題当座

寄鳥恋

我身尚この夜更行鳥か音をおもひそへつゝき、そ侘ぬる

来寅二月中臣延兼一周追慕

若菜 組題 二首

いさ我も行て摘なんなき人をわずれかたみの野辺の若菜を

梅雨

一めぐりはやもふりきてなきかけを空にそしたふ五月雨の比

明和七年

稲荷社法楽

正月分
柳弁春色 宗匠家出題

神垣に春のめくみの色見えてして打なひく風の青柳

宗匠家会始

二月一日分
松契春

色そふる砌の松のかけ高み千世万代の春を契りて

正月廿三日豊丸七夜にいはひの心を

なりいつる稲荷の山の陰高く猶もさかゆけ春のみとり子

二月社友稽古始兼題

花色春久

春ことに詞の花も色そひて尚幾千世も咲匂ふらし

稲荷社月次法楽

二月分
山余寒

いなり山こそその風やすきかてにころも手寒き、さらきの空

社友稽古会始親臣催

二月分於当家会始当座

立春風

久かたの空も長閑天津かせ雲吹わけて晴春や立らん

医師間枚亭安九十賀勸進冷泉家出題

寄菊祝老

老か見ん千世のかきりもしら菊のふりせぬ花の秋をかさねて

稲荷社月次法楽

三月分

瀧下藤

いなり山暮行春を瀧つせにせきとめんとやかゝる藤波

三月十八日人丸御影供進幾字を置頭下鴨為祐勸進十八首之内

別恋

聞きからにいそく別のわりなさを鳥はしらしなまたき鳴声

月次稽古会於松尾駿河亭兼題三月廿二日

籬款冬

ことゝへといはてう花に春ふかきまかきをしめて咲る山ふき

落花

同出座得探題

さそはても心なからや散花を吹なみたしそ庭の春風

三月十七日

江戸上野日光前御門跡随自意院宮御家采高橋図書より中菊

苗を贈為謝詞

高橋のぬしは元より菊を愛し給ふよし、うつ日さす都をはしめ、あまさかるひなにいたるまで、その名聞え侍りて、世にもはやすなみくの菊にはあらて、鳥かなくあつまより秘蔵しもた

る菊あまた侍るよし、花のみやこは名のみにて似及ひたる花もなしと聞えける折ふし、或人来て、菊は老たる人のもてあそひものにし物なし、とさとし教ぬ。やつかれも元より花をすきこのみ侍りければ、かねて見まほしく、さきのとの秋、ぬしのもとにまうて、花を見侍るに、数あまた色をましへ、なへて見なれぬ花のすかたかたち、えもいひしらぬ色香枝葉にいたるまで、うるはしくひたし生たてるさま、き、しにもいやまさりておとろき侍りぬ。もしぬしゆるしてめくみ給は、植みまほし、秘蔵のものをこふも心なけにおもひ、もたし侍りぬ。されと老かおもひをしと、めかたく、又たゝにこはんもくるしければ、安田の家にてたはれなからされ哥を作りて菊苗をこふ心をよせてよみ侍を伝へ給へとたのめに、そのいなせをまち侍れと、いなり山のまつにはしるしなく、音羽山の音も聞えず打過ぬ。さすかに人のなさけも春ふかくおも出給ひて、やよひの中つころ菊苗七種はかり安田の家につけてめくみ送り給ふ。露あさからぬ心さしの忝なみは置ところをもしらす。此かこまりのいやいひのへんため色なき言のはなから書付侍る哥二首

従三位親盛

春ふかき人のめくみの菊を植て花を見はやと秋を社まて

うつし植し菊には春も忘られて今はた秋の花をしそおもふ

(以下貼紙)

高橋図書より返哥

こひ給ふ事のいなみかたくて、賤か垣根に生出ける菊の苗をとりわけてまいらせけるに、春の花の中にも秋のけはひをなつかしみ給ふよしを二首の和歌にものして恵まる。いやしきことはなから、そのかしこまりを申とてかくはよみて奉り侍りける。

源高保

あはれてふ秋にめてけんことのはも今はた花の春に、ほへる

(以上貼紙)

三月廿四日松本讀岐守嫡子始而誕生巳萌參社对面名云峯千代

峯千代社頭にまうて給ふ日まみえ侍りければ寄松祝の心を

峯高く栄えん松の二葉より千代万代のかけそこもれる

牡丹

手を折て咲そめしよりかそふれはなにおふ草のはつかへにけり

宗匠家より牡丹を絵かける末広を給はりければかしこまりに

神垣にまつとりそなへ末広くさかふる道を猶も祈らん

あふきてそ見れはかしこきふかみ草心をそめし君の恵みと

稲荷社法楽月次

四月分
初郭公

稲荷山住は社きけ時鳥枕の木間にしのふ初音を

稽古会兼題於竈家会石見守

四月分
挿葵

老も又かくれんけふの葵草みとり涼しく若葉かさして

稲荷社法楽五月分

連夜水鶏

たか門と音もわかれす五月やみよなく何をた、く水鶏そ

稽古会兼題五月分於松本駿河守亭^③

五月分
栲

見し藤の色をゆかりに朽かはす松の木の間にあふち咲らし

四月分当座竈家より到来

残菊

秋ふかき霜をも花にいた、きてふりせぬ色の残るしら菊

稲荷社法楽

六月分
水辺螢

稲荷やま瀧のしら糸ぬきとめぬたまかと思れは螢飛かけ

月次稽古会兼題大西下野(上四字抹消)守亭

六月分
家々納涼

峯の庵ふもとの里もかけろひておなし心まつ夕風

同五分当座大西下総松本讀岐（上四字抹消）守亭会

田家

早苗とるしつかゆき、の音伝に小山田ちかき宿そにきはふ

稲荷社法楽

竹風夜涼六月份

吹そよく音も涼しくささ竹のよふかき窓にかよふ秋風

稽古会祓川親富

名越祓開六月份

誰つみもみなつきならし世はなへてもれぬなこしのけふのはらへに

同六月份当座松本讀岐大西下総（上四字抹消）守亭会

花留人

しはしとて立よりなからかへるさもおもはすくる、花の木の本

後（上一字抹消）六月一日祓川家会探題到来当座

見恋

浦にすむ身はあまならぬしわさにもみるめはかりをたのめにはしつ

稲荷社法楽

薄出穂七月份

朝またきゆふかけけりとしの薄ほのかに見えてあけの神垣

於毛利豊後守亭稽古会

残暑七月份兼題

秋さても残るあつさになつころも日もゆふかせそ袖に待る、

毛利家会探題到来当座

郭公稀

ほと、きす聞そまれなるいなり山五月もやかてすきの下庵

稲荷社奉納

月浮流水八月份

川水の底のさ、れの数見えてなかれもきよくすめる月影

於権目代信賢之亭七月廿一日

月次稽古会兼題

月八月份

しはしいままつもかひある稲荷山杵間ほのかに出る月かけ

為廉勧進

秋懐旧七月

露ふかく宿には尚もしたふらしきえし三とせの秋をむかへて

於信賢亭会探題到来

野月当座

月もまたおもひ出らし深草の野辺となりこし秋のむかしを

九月廿日信満信郷美父一周忌

秋懐旧

さめて尚ともに月見し面影を空にそしたふ秋の夜の夢

十月十三日五百五拾五年遠祭

鴨長明年回

上総介
梨木家祐為勸進

冬懐旧

神無月三々にしくれてふり残る名を聞ま二、にしたふ言の葉五

私に改

稲荷社月次法楽

九月分

籬下菊

山路より菊は色に千世こめておいせぬ色に咲匂ふらし

八月十日於信郷亭稽古会

九月分稽古会

紅葉如錦

常磐木も秋は紅葉に埋れてにしきと見えぬ山端もなし

稲荷社月次法楽

十月分

落葉随風

稲荷山夜半の風や杉の門あけて落葉の積るにそしる

八月廿日
於松本讚岐守亭稽古会

兼題十月分

夕時雨

夕日かけさしも定めず時雨行くものまに／＼晴くもるらし

於信郷亭会探題到来

当座
氷始結

絶す聞山下水も今朝はまつこほりそめてや音のしつけき

八月廿日松本為廉亭探題到来

当座
帰雁

春霞尚もへたてよこしの山かりのこえうく立かへるへく

九月四日(上四字抹消)

於松尾駿河相長亭稽古会

十一月分

冬夜

吹そよく竹の葉風も音さえてよふかき窓に霜そ置そふ

右同日探題到来当座

九月三日相長会当

款冬

春ふかく染なすまゝに山吹はえもいひしらぬ色に咲らし

稲荷社法楽

十一月分

河上氷

稲荷やま瀧津川瀬も氷つゝたえぬ流の音そしつけき

同月次法楽

常磐木雪

ふり積る雪としもなく稲荷山枕の木かけは道を残して

於松本信濃守亭稽古会
十一月分
雪

とへかした庭は浅茅の雪ながら山端ちかく見るに待れて

右同日会得探題当座

九月十五日
浦松 高教會堂

言の葉のつきせぬ道を例にそ世々に栄る若の浦まつ

来卯年三月六日冷泉古中納言為綱卿為村卿祖父也五十回追慕冷泉入

道澄覚殿勸進

春懐旧

そのかみの春の手向をおもひそへ色香にしたふ花のしらゆふ

此哥の意は故中納言殿当社江御法楽之内ニ社頭花といふ題

に□稻荷山春幾かへりさほ姫の手向□□□

今年十二月中旬冷泉入道澄覚殿より子筆にて寿字をこはれ

ければ筆をそめて送ける。そのいやに給ふ短尺に

謝 寿之字喚筆

寿もなをやまたかくつみうへむいなるの寿喜のなかくつかへて

澄覚

答

御詠 短冊 即答

神垣に尚社折れみいのちのななきしるしの杉をためしに 親盛
年の内に鶯の鳴けるを聞て

めつらした冬の日ながら長閑さに木の間ほのめく鶯のこゑ

年内立春

冬ながら春立空のに朝日かけ雪けの雲もはれて長閑し

歳暮

春秋の名残もけふはとりそへてくれ行としそ尚もつれなき

尾州横須賀坂丈之進返書之内に

紅葉摺の貴詠に

いなり山杉の木かけのもみち葉をさみにみせまく思ひそめけり

とよみ給□ひて下しおかれければ 正盈

稻荷やま名高き君かことのはにふかき紅葉の色を社見れ

明和八年

元日祝詠

長閑なるかけいちしるし久かたのあまつ日つきの千世のはつ春

うち日さすみやこの空そむるに立春そむるの春の光や世にあふくらん

鶯を聞て

山ちかく住すは聞し鶯の谷より出しけさの初音を

いとはやも梅か香さへに鶯の初音をそへてさそふ春風

稲荷社法楽始

正月
雪消山色静

稲荷山きのふの雪の消てけふのとかにかすむ峯の杉村

二月一日宗匠家会始

寄若菜祝

千世幾世尚つみそへむ春の野のわかにははふ宿の言の葉

社友稽古月次会始於松本讚岐守

正月分
二月分
二百懐紙

年ごとに春を契りて咲梅のはなにきなる、宿の鶯

二月分
右同断二首之内

若草の妻こふるらし春の野にかすみへたて、き、す鳴こゑ

下鴨社禰宜正三位俊永卿六十賀俊春卿勸進

飛鳥井家出題
松為久友

神垣に松のときはのかけしめて幾世さかへん友と社みめ

詠稲荷詣

脚点
初午や引つれ祈るもろ人のめくみへたてぬみつの神垣

稲荷社法楽

二月分
垂柳臨水

水鏡かけをうつして青柳のなひくを風のみかくとや見ん

同法楽

三月分
花有遅速

をそくとくこなたかなたに咲続て色香尽せぬ花の木の木

社友稽古会月次三月分会当親臣 但探題嶋夏草

雲雀

天津空行えやいつこ雲に入かすみに消てあかるひはりは

於松本讚岐守亭二月会探題至当座

故郷萩

真萩咲霧の故郷とは、やなむかしの秋の色のゆかりに

詠落花隨風

さそはても散てふ花のことはりをしらぬはうしや庭の春風

稲荷社法楽月次

四月分
舟路卯花

暮て行ふなちともなし河岸にうの花咲る色を光に

月次稽古会六月廿日於祓川常陸介

四月分兼題
郭公

世にはまた聞ぬう月に谷近くすむかひあれや山ほと、きす

五月まつ花に契りて時鳥世にもらさしとのひ音や鳴

右二首共宗匠家御点

三月相模守会当之節探題当座

嶋夏草

川嶋やみきは涼しく夏草の中にそめわく露の撫子

三月すゑつかた藤尾社に参りて藤花咲たるを見て、此地も

とより藤尾山といへる古名をおもひ出てよみ侍る哥二首

松高き藤のをやまの花かつら幾千世かけてくり返し見ん

春幾世むかしなからや咲かゝる花の名におふ藤尾の山

いはゆる藤尾山は旧きふみに大和大路の西、稲荷山の禁な

るよし。案に当社の今の社地となれり。右哥二首は三首よ

みて冷泉家へ伺ふ。入道殿御点給也。

稲荷社法楽

樹陰夏風

風かよふ森の木陰は夏ころもひもゆふかけて袖ぞ涼しき

月次稽古会大西下総守亭

水鶴

朝またき出て仕へし我門をなにあけよとてたゝく鷗ぞ

明和八年六月十一日冷泉家之遠祖為秀卿四百回遠忌入道為

村卿追慕勸進御出題

夏懐旧

夏ふかき露のくさはもつみそへんふりし跡とふけふの手向に

稲荷社法楽

江上納涼

浪風の音もさながら涼しさはあきや入江にまたき立らん

社友稽古月次羽倉撰津守亭

鵜

夕月の入かけまちて鵜飼舟さす間もなみの夜半そ更行

人々あさかほの哥よみければよみ侍る

咲匂ふ色も涼しく秋を待つゆにひもとく朝かほの花

冷泉前大納言入道澄覚師為村六十賀当所門人申合詠進哥

六十の賀とりをこなひ給ひければいはひの心をよみて寿奉る

従三位奏親盛

年たかく君をそ祈稲荷山幾世もすきのときはかきはに

入道殿より

幾世も杉のと聞えしかは

いなり山いの言葉もいやとしのたかきためしを杉にならむ

ちよう覚

稲荷社月次法楽

七月分
草花早

いとはやも秋来にけりとふちはかまほころひ匂ふ野への初風はつ

七月分稽古会
鵲

契りけん秋や幾秋かさ、きのはねかはすてふ天の川橋

江亭眺望
探題当座

宿ちかき入江の小艇いつしかにゆくとも見えす浪遠かた

臨時
秋花月

夕露も光をそへて秋の野の月にそ匂ふ花のいろく

八月分
稲荷社月次法楽

秋苑月

露むすふ草の園生は照月のひかりを花とちらす秋風

八月分稽古会
初鴈

雲霧も風にはれて山遠くこゑもさやかにわたる初鴈

八月十五夜詠社頭月

稲荷山秋の最中と照月の光はさしもみつの神かき

九月十六日於松尾安芸亭

社頭祝
探題当座

栄之行御世をそ守る稲荷山しるしの杉の常磐堅磐に

稲荷社月次法楽

九月分
寒庭虫

霜むすふ庭の浅茅によもすからなく虫の音そいと、寒けし

九月分
稽古会

九月分
鶉

夕間暮哀は尚も深草や秋風さむみうつら鳴声

九月十三夜月

日本の光そこよひあふかはやさらに照そふ長月の影

九月於羽倉石見守亭

寄烟恋
探題当座

あたなりと人は見つ、もゆふ煙おもはぬかたに立な、ひきそ

九月十一日於竈家

寄風恋
探題当座

とはさりし軒端の松に此夕吹はつれなき人の秋風

稲荷社法楽

十月分
杉路霜

稲荷やま行来の袖もさえくて霜をかさぬる杉の下道

稽古会月次松本信濃守会

十月分
鶉
探題当座

神無月尚咲残るしら菊の花になれきてあそふ友鶉

稲荷社月次法楽

十一月分
蘆辺水

難波かた芦辺よふかく置霜にみきはもけさは氷そめけり

十一月分
稽古会大西下総守会当座路藤

十一月分
千鳥

いつこにか妻を沖津の小夜千鳥なみの立りに鳴わたる声こひ

稲荷社法楽

十一月分
連日雪

日をふれはいなりの山のいや高く峯にも尾にもつもるしら雪

稽古会毛利壱岐守会

十一月分
水鳥

住なれし芦辺こほりて朝日さすみきはにうつる池の水鳥

来辰年正月七日

曾祖父古社務親修禰尊灵百年灵祭引上十二月七日執行供

進之哥二首

寄庭五葉松詠懐旧意

植残す五葉の松のいつしかにも、とせふりてさかえ行かけかけぞさかゆく

寄遺書筆跡詠懐旧意

幾めぐりたえぬ流のいへのよしむかしをしのふ水くきの跡

明和八年ひさしくやみこもり侍るとしの暮に

身につもる月日もしらてやめる間に七十ちかき年そくれ行

やめる身はいとはや年も暮やと心ほそくそおもひわひぬる

十二月三日羽倉上総介会松本信濃守

淵亀

住かめの哀ぞ深き飛鳥川洩も瀬になるをのかわもひに

路藤

紫のゆかりたつねてふちのかは花に立よる里の中みち探題宮庭

明和九年辰

歳日

かしこしな恵みへたてぬ神垣にまれのよはひの春をむかへぬ御点

明そむる千世の光をあふかましけふ七十の春をむかへてささ

明和九年辰

稲荷社月次法楽

冷泉入道殿出題

正月分
春來日暖

稲荷やま日かけ長閑に春くれはたきつなかれも水とけ行

元日

天の戸の明夜つけて鳴鳥のまつ春しるき声の、とけさ

いなり山春來にけりと今朝はまつ光をそへてあけの神かき

いなりやま春立けふのしるしとて峯の杉村かすみそめけり

去年より心ちそこなひわつらひ侍りて、正月五日三みねま

うてにえまうて侍らさりければ

老ぬれと引しめ繩の長くあらはふた、ひみつの峯にむかはん

冷泉入道前大納言澄覚殿より正月七日給御詠

寄若菜祝老ことは

つむとしの老は七十な、くさのわかなに契れ幾千世の春

右答哥 従三位秦親盛上

正月七日耳かたしけなくやつかれか七十を若菜によせて恵

み給ふ御詠に答へ奉る。

かしこしなけふの若菜のな、くさに七十いはふ君の言の葉

二月一日

宗匠家和哥御初会

鶯契万春

砌なる松をためしに鶯のはつ音に契る万代の春

正月廿日畑柳安より到来

画一卷王母献寿図二律詩作一章其詩云

城頭春色日相催 天外三峯瑞靄開

七裘シツ偏通鴻寶術 千齡誰識歲星才

南山称寿蟠桃熟 東海延僊白鶴來

欲向瑤池問王母 五雲生處是蓬萊

奉賀

荷山三位大西君七十寿算

黄山柳安印

右答哥

畑法眼黄山ぬしの許より、やつかれか七十のよはひふりに

しをことふきて王母献寿図匣に唐哥を作り書そへて恵み贈

り給はる。その心さしあざからさりしいやをのへんために

やまと哥を読んでこれを謝し侍る。

枝かはす桃も柳もいとなくとも契らん三千年の松

従三位秦親盛

稻荷社法楽月次

水辺柳

いなり山このめも春は池水もみとりにすめる青柳の陰

鶯をき、て

また咲ぬ梅の梢に春しるく花を、そしときなく鶯

社友稽古始会 兼題二首

二月廿二日於松尾安芸亭

梅盛

木々はみな遅き梢も咲そひてさかりそしるき宿の梅園

路若草

夏はまたにけまよふらし春草のひとつみとりの野辺の通路

稲荷社月次法楽

杜間花

春幾世八千代をかけて咲匂へ森の木の間の花のしらゆふ

社友稽古会於松本讃岐亭月次兼題

花雪

雪とのみ空に散かひくもるまで花の梢を払ふやま風

閨叢

同立座
探題到来

さらてたにねさめかちなる闇の上にあられふる夜をあかしわひぬる

子日

二月廿二日松尾安芸より到来当座

年ごとに祝ふ子日の小松原千とせの春を袖にかさねて

稲荷社法楽

夕郭公

時鳥世にはもらさぬしのひ音をいなりのやまのゆふかけて鳴

稲荷社法楽

瀧下蛭

いなり山瀧のしら波よることに玉かと見えて蛭飛かけ

前妣真測灵

依五十回奉追慕供進歌夏十首組題之内詠三首

卯花似月 但此卷頭藤嶋下野守信允江勸進仍不入

めぐりきてその世かはらぬうの花の月にむかしをしのふ面影

卯月郭公

時鳥けふの昔をしのひ音になれもう月の空に鳴らし

杜蟬

露ふかき森の木陰に鳴せみのこゑもしくれて袖そぬれぬる

寄涙懐旧

五十とせにふり残る身そ跡をとふ哀なみたを袖にかさねて

稽古会 四月廿五日祓川親富会当

卯花

朝戸出の袖さむきまで雪の色をかきねに見せて咲るうの花

稽古会 五月十三日親臣会当

田辺蛭

千町田やせき入水に数あまた見ゆるほたるのかげの涼しさ

三月十日松本講州亭会

閨轂

重祿書之可除

さらてたにねさめかちなる闇の上にあられふる夜をあかしわひぬる

四月廿二日取越四月廿二日執行

保田内匠頭忠辰朝臣十三回追慕歌娘みの勸進

早春鶯

鶯の初音に尚そしのはる、はるや昔の春めぐりきて

松本和泉守高任宿祿六十一賀歌公林高教等勸進

四月
子日

老をけふいはふ子日の小松原引や手ことに千世を契りて

親臣親業等ことし七十のよはひをふりしをことふきをいひ

のへんと冷泉家に和哥の題をこひねかひければ、松為友と

いふ題を出し給ふよし、うからやからをはしめしたしき

人々にもすゝめ、あまた哥をとりかさねて賀し侍りぬけれ

は右の題の心にまかせて謝侍る哥

老をいはふ松のいつ葉のいつまでもゆくすゑ遠き友となれ見ん

氏藏人常芳の本より七十を賀して

源常芳

稲荷山いやとしたかくかさねきてさらにはや千世もつかへまつらむ

ことしやつかれか七十を賀し給ひて若竹の蒔絵をかける盃

にやまと哥をそへて恵み贈り給ふ。その心さしのねもころ

なるさま、拙き言の葉にはいひつくしかたく侍れとたゝに

もたさんもかへりていやをうしなふことになりたれば、

腰折哥をよみてこれを謝し侍る。

かけしめて長くそくまん笹竹のめくみの露の玉の盃

従三位親盛

五月十三日御殿預荷田信郷之本より

題竹奉寿

従三位秦君七十

脩竹森々繞玉堂 貞姿高節見休祥

更怡枝葉千年緑 偏似主人眉寿長

正五位下荷田信郷拜書

答

やつかれか七十をことふき給ひて呉竹を絵かき唐哥を作り

書そへて恵み贈り給はる。そのねもころなる心さしのいや

をいひのへまくほりすれと拙き言の葉には中くいひつく

しかたく侍れと朽葉をつゝりてその詩の玉韻をけかして謝

し侍るのみ。

起ふしの友となれ見は千代もへんはかへぬ竹の契り長くも

従三位親盛

暁恋 探題当座

四月廿五日親雷亭会

逢と見し名残はふかきあかつきにさめてそしたふ夢の面影

篠雪 親臣会探題

五月十三日

吹さそふ風も蔽も音たえて雪にしつけき野辺のさ、原

稲荷社月次法楽

五月分
納涼風

稲荷山すきの木の間に吹過て袂す、しくかよふゆふ風

月次稽古会 信邦会当

六月分

こなたまで煙へたてすあし垣の間近き宿にかやりをそたく

五月雨 即事

目をふれは千町のさなへ色そひて恵みあまねき五月雨の比

従吉見三河到来詩

做雪霜号貞節全 留雨露号緑玉連

子猷林中無改色 此君對見萬期堅

右奉賀

大西三品秦公七十初度

喬松菴管子栗拝稿

答

吉見三河菅原正寛和哥

やつかれか竹林亭に寄題し給ひ詩を賦して七十をことふき

給ふ。誠に露浅からぬ心さしのいやをのへんと色なき言の

葉なからやまと哥をよみてこれを謝し侍る。

陰ふかき竹のみとりの言の葉の葉かへぬ色そ千世の友なる

従三位親盛

五月廿八日やつかれか七十ふりしを賀して直親宿禰公満宿

禰のもとより松の枝に盃をつけて贈り給はりぬ。誠に露あ

さからぬ心さしのいやをいひのへんために、さかつきとい

ふ詞を句の間によみ入て謝し侍る。

五月雨の空もはるく老のさかつきにこえ行かけの涼しさ

従三位親盛

ちかおんちかなりふりか本より古賀の枝に哥をかき付て贈

り侍りければ心の悦をいひのへんとよみ侍る。

幾千度猶こえゆかん老の坂つくともつきぬ枝の数く

やつかれか七十の賀し侍りければ冷泉入道殿よりことふき

の詞を唐哥に作書けるうるはしき盃をいはひて恵み給は

る。その包かみに。

老松の木かけ賑はひ打むれてこゝろたのしくいはふことふき

といふ御詠を書そへて贈り給はりければ

親盛

浅茅生の宿のふる木も梢までもれぬ恵みのかけそ賑はふ

従橘堯常橘本總後賀七十

此宿のさかへもしるし神もさそまもりますらむ千世のよはひは

やつかれか七十を賀し給ひていみしき末広にやまと哥をそ

へて恵み贈り給る。誠にいんさきみやつかへし侍る時より

はらからのさまにむつまじかりしか今に猶むかしかはらす

ねもころなりし心さしをいやいひのへんこと拙言の葉には

いひ尽しかたければ只ことふきて給ふ哥の答をのみよみて

謝し侍る。

いや高きかけをあふきていなり山此神かきに千世もつかへん

従三位親盛

稲荷社月次法楽

初秋萩

稲荷山立秋しるく咲萩のけさは花をもみつの神垣

稽古会月次於目代家会兼題

草花露

野を広み花のさま／＼色わけて露さへにほふ秋のもゝ草

同探題
神楽

そのかみの岩戸もかくそ明るよの空もほの／＼庭火たくかけ

六月十日於竈家会探題

契恋

等閑におもひなすきそ色かへぬまつをためしに契る言の葉

稲荷社月次法楽

初馬来

稲荷やま木々の梢も色つけはふもとの小田にかりの来にけり

稽古会於高教亭被催八月十日兼題

水辺月

浪風の音もさやけし大井川つきのかつらの秋の光に

駒迎同日
探題当座

千々の秋くもらぬ御世に相坂の関路こえくる望月の駒

稲荷社月次法楽

擣寒衣

いなり山聞も霜夜に音さへてころも打なり深草の里

月次稽古会兼題於公林亭被催九月四日

朝霧

明わたるふもともそこと見えぬまで朝きりふかき四方の山のは

同日探題
早蕨

折はやす心も野辺の長閑さははるの光にもゆるさわらひ

九月十三夜に人々月の哥よみ待りてよめといひ入れれば

御点 秋つすの秋のこよひと雲霧もはれて名におふ長月の影

めてあかぬ後のこよひの秋ふかく尚も照そふ長月のかけ

稲荷社月次法楽

十月分
山初雪

いなり山ふもとの杉もしろたへのゆふかけそふる今朝の初雪

稽古会月次於親業亭十月十一日被催兼題

十月分
夕木枯

秋の色をさそふのみかは夕間暮吹そ寒けし山の木からし

月次会十月十一日親業亭より到来探題

山家

山ふかく哀すむてふかひもなくうき世にすれぬ人の心よ

稲荷社法楽

十二月分
池水鳥

ことかこや先こほるらしいなり山池のみきはにわくるをしかも

十一月廿八日稽古会於親富亭兼題

閨上叢

さらてたにねざめかちなる閨の内に叢ふる夜は夢も見はてす

明和九年辰十一月廿六日

家祖父親光宿禰百回追遠供進

冬懐旧

点 霜雪とふりし袂にいそとせを重てけふのあとを社とへ

霜月のかけをかさねて百めぐりその世をしのふ有明の空

来巳年正月廿四日

家祖親清宿禰五百回追遠供進

春懐旧

点 あふけ尚遠き昔のたまさかにあくれるけふの春の光を

世々遠く霞へたて、久かたの空にそしのお五百年の春

梨木家 下鴨社禰宜正三位鴨祐之卿来巳年正月廿九日五十回其孫祐

為宿禰勸進祐為俗泉家之門
人云梨木上院介

春述懐

点 幾めぐりかすめる空になきかけをいまはたしのふ五十年の春

□る文に残る名しるくめぐりきて世にもしのはん五十年の春

(以下貼紙)

明和九年十月十三日菅原永叙後妻房男子誕生、七夜にその

子を松よせて千世松と名つけて祝の心をよみはへる哥
二葉より松のときはにとり子のおひさきいほ千世の行すゑ

明和九年十月廿二日前妻美与三十三年にめぐりける日説て
手向侍る

老ぬれは尚そしほる、神無月なきかけしたふ袖はしくれて

(以上貼紙)

安永元年辰十二月

稲荷社月次法楽

十一月分
歳暮梅

稲荷山また暮はてぬ年の内にまつ咲梅をみつの神垣

社友稽古会月次十二月分十二月十一日於為廉亭満会

網代寒

あしろもる身や寒からん衣手の田上の川に霜をかさねて

十一月廿八日於親富亭会探題

初冬

冬くれば時雨をさそふ山かせも今朝吹かふる音のはけしき

十二月十一日於為廉亭満会探題

山

老ぬれはなれし身たにも聞わひぬ軒端はけしき山かせのこゑ

或人和哥の書二卷たつさへきたりて、見れば宗匠家の著述
の書と見侍りければ、その出る所しかく尋けれとさたか
ならてあやしとおもふ心をよみてやかて宗匠家へさし出し
侍る二首

若の浦になみくならぬもしほ草あやしやこ、に風さそひこし
くり返し見つ、そおもふもしほ草もししら浪のさそふわさかと

其後右件乃書籍熟覽畢入道殿江説てさし出す哥并御答の御詠

明月の門に入ひとくこの道に入まよふをあはれとおほし

めして御教誠の文二まきしるさせ給ふを、くり返し巻返し

て置ところをしらす押し見かしこみて

分まよふ人はあらしなあきらけき月に小倉の道しるへせは

入道殿御答御詠

あきらけき月をしるへの道しるへともまよはぬ跡もかしこし

澄覚

安永元年辰十一月

歳暮

なへて世に暮行けふの年月をわか身にのみと惜むをろかさ

安永二年癸巳年

年始にいはふ口号

安やすらけく永そいはふあらたまの年の名しるき千世の初春

春立ける日読侍る

稲荷やま春来にけりとこの朝けかすみてみつの峯の長閑さ

春のはしめ雨そほふりて鶯の鳴けるを聞て

ふりそめて草も木のめも春雨にうくひすとなく声の長閑さ

稲荷社月次法楽

正月

神垣に仕へてかさす梅の花やちよをかけて匂ふ春風

藤原助具去冬新藏人に被補今春悦を申遣哥

院藏人より内藏人にうつり昇進し給ふ悦をいひのへんと

祝の心をよみて送り侍る。

春幾世尚色そへてさかゆかん大内やまの春をためしに

藤原宗韶の先祖宮つかへし侍る始をたつぬれば当家よりわ

かれてこのたひ院の藏人に補られければ、外ならずかたし

けなくわきて悦ひを申つかはすとて

かしこしなほとやの山の春幾世みとりをそへて尚もさかゆけ

答 藤原宗韶

あふくそよめくみかしこき洞中に春のみとりの色そ、ひぬる

二月 下鴨梨木上総介祐為之母儀六十賀勸進

寄松祝

いく老のよはひは松をためしとて宿に色そふ万代の春

二月一日宗匠家御初会

寄竹祝

吹も異に長閑かりけり此宿にはかへぬ竹の千世の春風

稲荷社法楽

若草

野をひろみ竹の葉山も色そへてみとりにつゝく春の若草

社友稽古会於権目代上総介亭

江上霞 二首之内

住吉や松のみとりも色そへて長閑にかすむ春の海原

社頭松

神垣に春幾めぐりいろそへてかけいや高き森の松かえ

稲荷社法楽

苗代

引しめにさかひもみえてわせおくて種まさわくや小田の苗代

稽古会於竈家四月十日会

野亭童

春の野は草の庵の軒端まですみれつみこし人そ賑はふ

二月分
権日代家会探題

橋

山桜峯の嵐のさそひきて花咲わたす谷のかけ橋

春雨に即時

野も山もわかす緑の色そへてめくみあまねき春雨の空

伏見の里にて春雨に梅花のしほれうつろひなとしけるを見
て山の花をおもひやりたる心を

梅溪の花はいかにやなりぬらんさとの梢も雨にうつろふ

二月五日菅原正寛母の九十の賀し侍る祝のもちひに母のみ

つから筆をそめて寿字をかけるをそへて祝おくりけるに謝

して読てつかはし侍る哥

神籬に老のよはひををためしにていのち長くそ猶もつかへん

為廉許より千載の桜の花を折て送り給はる返事に

手折こす人のめくみの色香をも露浅からす花に社見れ

梅の花さかりに

匂はすは雪と見るまで咲埋梅のさかりの花の春風

三月十七日
稲荷社神幸

稲荷やまもとの御幸の跡とめて尚もさか行神のまに〜

同繪旨

神まつるみことかしこみいなり山榮る御世を尚も折らむ

同奉幣

万代とけふのみいてのいやしろにいはひさゝくるうつのみてくら

(以下貼紙)

三月廿八日の夜の夢に家父古三位殿より給はる哥

いとかろく瘡瘡の神や守るらんみきをそなへて汝祭らめ
その夜夢さめて答まつる心を書付る哥

かしこしなみやみかろくまもるてふ神にみきすゑいはひまつらん

(以上貼紙)

稲荷社月次法楽

閏三月分
款冬

いはてしも春とはしれる色見えて盛久しきやまふきの花

社友稽古会於大西下総守亭

閏三月分
閏月花

遅桜くはゝる春の色香とて尚めつらしく誰もめつらん

椿の花を見て

朝なゆふなつら〜椿つら〜と見つゝ巨勢野を花にしそ思ふ

閑居の花の心を

春なから人しもとはぬ山里はた、花をのみ友とくらしつ

春雨のふりける日

さのふまてめてこし花もふりそひていと、さひしきけふの春雨

やよひのうるふ月のすゑつかたにしきりに鶯の鳴を聞いて

くは、りし春はいくかもあらしとやたえすなくなる鶯の声

直親宿祢杜若花を持来り恵み給はりければ

色に香にしろくそ見つるかきつはたむらさきふかき人のめくみを

杜若をこと所にうつし植ければあやめの花のことくさき侍

ると人のいひければ

移し植し汀をうしと杜若あやめもわかす花や咲けん

四月三日卯
稲荷社還幸御祭の日

稲荷やまあふひのかつら御世長くかけてそまつるみつのか神垣

稽古会月次兼題五月廿二日於高教亭被催

四月分
新樹露

朝なゆふな露も涼しき玉かしは山は葉ひろに若枝さかえて

四月分
稲荷社月次法楽

更衣

いつしかとうつりにけり夏衣いとひし風も袖にまたれて

野
三月分金龜家探題

見し春の色香の、ちは都人嵯峨野の秋の花を社まで

五月分
稲荷社法楽

郭公帰山

ふる巢にや今かへるらん時鳥いなりの山のすき間行こゑ

社友月次稽古信邦六月廿二日被催五月分龜家より探題河水

到来

夏暁月

夏なから秋も覚ゆる涼しさはあかつき露にやとる月影

閏三月廿三日於東家稽古会探題二首之内

折款冬

けふもあれとあすこん人にみせはやとかつ折残す山吹のはな

瞿麦花を見て

朝な夕な見るたひことに色わきて尚めつらしく咲る撫子

閏三月廿三日於東家会探題二首之内

外山鹿

哀さは正木のかつらくる、よりあくるとやまに鳴鹿の声

四月十九日
孫親実いむさき非藏人の見習に侍りけるを此度別につとむ

へきよしめしくはへさせ給ふかたしけなさをかしこけれと

我後の世までしらしめんと

何にかもつゝみて置んかしこさは子らか袖までもれぬ恵みを

五月朔

妻か老母奈良よりまかり来てけふなんかへると聞えければ

撫子によせて

花もけさ哀にかれの色見えてしほれにけりな露の撫子

五月五日

藤森社神祭

年ごとにたえぬ祭の神のこまさつきのけふのゆふかけて引

同走馬を

深草やけふの祭りの里の馬あやめのかつらかくるをそ見る

来午年五月一日中院為家卿五百回忌冷泉家御追遠

夏懐旧

五月やみけふの昔をしのひ音になくや小倉の山ほとゝきす

今年八月廿九日平等院殿為久卿三十三回冷泉家御追慕

秋懐旧

幾めぐり秋をかさねてふりし世をしのふ袂は露そ置そふ

あひしれる人の身まかりにけるよし告こしたるをきゝて

たれも行道とはいへとはかなくもさきたつ人ぞ悲しかりける

稻荷社月次法楽

六月分

杜夏草

陰ふかく森の梢も一つ色にみとり涼しき露の夏草

稽古会兼題

六月分

河夕立

水上やふると見しまにはや瀬川風きをひきて過る夕立

五月廿二日於高教亭会探題

四月分

旅夕立

此里にやとりとらなん雲とちてゆくゑも見えぬ夕立の空

時鳥の初音を聞て

山ちかく住は社聞時鳥世に待あへぬまたき初音を

には待えぬ

稻荷社月次法楽

七月分

庭萩

庭もせの月に夏まつゆふくれはそれかとまかふ萩の立風

月次稽古会

七月分

萩映水

川岸に陰をうつして咲萩はなみのあや織錦とや見む

稻荷社三神主等より七月六日にとしく草花七種を伝奏家

に附てさし上献れり。ことしもかはらすさし遣献る祝の心

をよみ侍る哥

御点

御世なかく猶幾千世もつみそへてさゝけまつらん秋の初花

星合の契りのためし千五百秋たえずさゝけん七種の花

門柳 藏川家会
探題

なひかすは出入人も等閑に見てや過なん門の青柳

河水 龜信見会
探題

山河のたえぬなかれも小夜ふかくこほるやけさは音のしつけさ

乞巧奠 探題心求

あひにあひてけふ九重に匂ふらんほしの手向の花の七種

稲荷社月次法楽

野鹿

草ふかく妻やこもると男鹿なくこそ吹おくる野辺の秋風

稽古会兼題月次

竹間月

深草や竹の葉山の月の夜は小枝もりくる影を社まで

老岐国老岐郡函崎宮大宮司吉野常陸介老岐ノ公光年来毎々

懇望之処今度頻依乞不得止事猥詠俗題尤何入道殿一覽之上

応求如左

老岐国宮崎宮

十二景

廟前ノ桜花

神籬の光をそへてさくら花いろ香にあくる宮前の春

殿ノ東紅葉

露しくれ秋の手向と幾千入との、みきりにそめしもみち

七枝馬石

昔たれ七枝のまつを岩か根にこま引植し跡にや有けん

釘卯夜雨

小夜ふかく雨のふりきて音たかく窓打すさむ釘の尾の里

馳馬釘石

いつの世に神のみやつこ打みつ、名付そめけんは、の釘石

天山ノ晴風

雲はみな松のあらしに吹はれていやかけ高き天津山の端

平江落鷹

幾つらそ浪路はるく渡りきて平江の小田にあさるかりかね

中山穂月

いつはあれと猶此ころは照そふる月の名高き秋の中山

大窪積雪

幾日かすふりそふまゝにおほくほの野辺さへ高くつもるしら雪

瀬戸ノ帰帆

瀬戸の海漕行おきやなみあらくおもふかたほにかへるうら船

清浜潮声

清浜や浦風遠くさそひきてさし引塩の音を聞ゆる

東ノ海ノ漁火

あま人はいとまもなみのよるも尚ひかしの海にかふいさり火

安永二年七月

御霊祭りによみてそなへまつる哥

そのかみの世々のみたまに玉串をさゝけ手向ていはふ初秋

此ゆふへ御霊の祭のいやしろにそなへ手向る秋のくた物

稲荷社月次法楽

水辺菊

咲匂ふ此山水の底きよくちとせのかけをうつすしら菊

稽古会月次於松尾安芸亭

庭紅葉

夕附日猶一入の色ぞ、ふしくれし庭の露のみちは

稽古会大西家

海郭公

さたかにも此ゆふなきに聞はやな浪にまきれす鳴ほとゝさす

八月十五夜月

十夜あまりいつよりもけに空はれて名高き月の影そ照そふ

八月十五夜於松本家会探題到来応求

月多秋友

此宿に猶も契らん秋ことにもなふ月の万代のかけ

於毛利家会探題到来

寄水雑

幾世、かつかへてすめるいなり山たえぬなかれの端の神かき

稲荷社月次法楽

寒草

玉にぬく露の尾花もいつしかにむすひかへたる霜の寒けさ

稽古会月次

落葉深

吹さそふ庭のあらしも色見えて落葉の上につもるもみちは

重陽

幾千たひ尚も汲はや長月のけふ咲匂ふ菊の盃

九月寿良七十賀

寄鶴祝

契れ猶宿になれきて末遠く千世を重ねん鶴の毛衣

三輪家よりむこかね則黨身まかりし由告来を聞て

浅からず結ひ置しか露の身のはかなくきえし人そかなしき

襖のやれたるをかくさんためいろなき言の葉の短尺押けれ

はわかぬ浦なりと人のいひければ

はつかしなかさあつめけるもくす草わかのうらとや人の見るめは

石峯寺時学和尚の本へ菊花を贈り遣す文の奥に書付侍る哥

見せはやと待過す間に色もかもうつろひぬれば手折しらすく

稲荷社法楽

雪中鳥

秋霧の空にをづれていま来鳴ゆきの夜寒き衣かりかね

稽古会月次

石間氷

よもすから河かせさえて行水のよとむ石間やけさこほるらん

於松本讚岐守亭十月分

稽古会探題

春月

咲梅の色香もともに立こめてかすみに匂ふ春夜の月

稲荷社月次法楽

夜神楽

神垣や引しめなはの長夜にふきもたゆまぬ糸竹の声

稽古会兼題

春漸近

暮て行としのこなたにいとはやもはるまつ梅や咲匂ふらん

年内立春

神垣はまたふるとしのみしめなは冬かけてけふ春やくゆらん

(以下、続稿)

注

- (1) 「そふ」の左傍に抹消符を付した上でその抹消符を更に墨で抹消、右傍に判読不能な文字を書きそれを墨で抹消。
- (2) 「や」の左傍に抹消符を付した上でその抹消符を更に墨で抹消、右傍に「の」とあり抹消それを墨で抹消。
- (3) 「松本駿河守」を墨抹消し、左傍に判読不能の数文字あり、それを墨抹消。

【附記】本研究は「SPS 科研費19K00351」の助成を受けたものである。